

## 5-10. 地域を知ることが防災の第一歩

日本列島は災害列島とも言われ、毎年多くの自然災害が多発し、多くの被害や犠牲が出ているということは周知されています。しかし、自分達が住んでいる地域が、同じような災害に会うということは多くの人が想定していないし、他地域での報道があっても対岸の火事と思っていることが、残念ながらあります。自然災害は必ず来るわけで、まずは自分たちの住む地域がどのような環境にあるのかを広い範囲で点検しておくことは絶対に必要なことだと思います。想定外だったとか、まさかここで災害に合うとは、これまで災害が発生したということを知っていないなどとならないようにするためです。私たちは機会がないと、いつ起きるのかわからないものにまで神経が行き届くような生活はできませんし、かといって杞憂では暮らせませんという中で、自然災害に対して鈍麻になっているように思います。災害はいつも住んでいるところで出会うとは限りませんので、他のところにおいても直観力が働くように、まずはいつも居住しているところで備え方を身につけておくことで役に立ちます。もちろん自分が助かることが一番ですが、助かれば他の人を助けることもできるし、救助を手伝うことも、避難先での支援もできます。

地域は、どこにも自然的な歴史と、社会的な歴史、人文的な歴史が積み重なっています。そのような中に、災害に備えるための知識や知恵が隠されていることが多く、そこから学んで基本的な下地を作って、様々な方法、ツールを取り込んで、情報を共有して互助する縁を地域で持ち合わせることにしたいものです。

我が国の居住域は、国土の構成から見ても非常に限られていて平野部に集中しています。そして、利便性や居住性から様々な改変を加えてきています。当初は地形に沿ってというかその特性に合わせて利用していたものですが、人口増加や様々な技術によって住めないところを居住空間に変えてきています。いわゆる自然地形をみるものがなくなってきている様相がありますが、そのスピードは地球年代的にはまさに一瞬のことです。そのために、自然のシステムを無視したものもあり、そのようなささくれが、気象の外力を受けると、見つけ出されて大きな傷を受けてしまうことになります。

例えば、大きな河川があって、かつては広い範囲で遊水していたものが、堤防やダムといったもので抑制されると、周辺は一見安全地帯になったような錯覚になってしまいます。しかし、居住域にしてしまっているところが破堤してしまったり設計条件を超えるような降雨量が発生すると、またたく間に、浸水氾濫というようなことが起きます。かつての地形区分や土地利用のことも折り込んだ地域づくりをしておかないと、それこそ想定外の被害を受けることになります。

また、かつての土石流が発生した沢の出口は緩傾斜の広い地形になっていることから、宅地に造成されることもあります。このようなところは再度土石流が発生する可能性もあり極めてリスクが高いところでもあります。また、大規模な造成地では、もとの沢や凹地を埋め立てた谷埋め盛土が、経年的な変化や地震による揺れによってすべりを起こす例も知られています。